

学位審査結果報告書

学位申請者名	張美慶	学生番号	27049006	専攻名	観光学専攻
論文題目	医療観光行動意図に影響を与える要因間に関する研究 —韓国を目的地とした医療観光行動を中心に—				
論文審査及び最終試験の成績（表記は合格又は不合格とする。）				合格	

審査委員会

主査 尾久土 正己



委員 北村 元成



委員 廣岡 裕一



委員 宮城 博文



※自署する場合は押印省略可。

[論文審査の結果の要旨]

本論文は医療観光についての3つの研究から成り立っている。それぞれの研究では、医療観光について、アンケートを行ったうえでデータ収集を行い、分析ツールを用いて分析を行い、その結果、明らかになった成果を示している。そのうえで、それらの分析を運用した経過を踏まえ、医療観光について影響される要素を見出すモデルを構築したことに新たな知見がみられ、本論文の新規性、独自性をみることができる。

さて、近年の世界の観光市場を考察すると、訪問客数、並びに観光消費額の増加等により、国や地域において観光を通じた経済振興や社会的なインパクトが期待されている。一方、当該分野において、訪問客の増加に伴い、マス・ツーリズムやオーバーツーリズムという課題が浮き彫りとなってきている中で、消費額の増大、並びに他地域における観光コンテンツとの差別化が可能な新たな「ニューツーリズム」の必要性が指摘されている。こうした実情の中であっても、日本の観光学研究においては、ニューツーリズムについての研究は、個別的、事例的な課題を取り上げたものはみられるもののニューツーリズムについて、俯瞰したものはあまりみられない。本論文は、ニューツーリズムをすべて取り上げているわけではないが、韓国における医療観光を新たな観光コンテンツの可能性として捉え、その医療観光を中心として分析した、ニューツーリズム研究の嚆矢を築く課題設定をしており、新たな知見を見出すためのテーマに対する問題意識に適合性がある。

本論文では、当該分野における行動意図に影響を与える要因間関係を明らかにすることを試

み、その方法としては観光行動の研究で注目されている 3 つのフレームワーク(合理的行動理論[TRA]、計画的行動理論[TPB]、目標指向的行動理論[MGB])を応用させ、3 つの実証研究が行われている。

第 1 の研究で用いられた合理的行動理論[TRA]は、Fishbein & Ajzen(1975)の「合理的行動理論」を適用したものである。ここでは、訪韓医療観光客のうち、日本人潜在医療観光客を対象に、韓国の国家イメージが彼らの態度および行動意図に及ぼす影響を検証した。その結果、社会的イメージ及び関係的イメージが態度に影響を与えること、態度が行動意図に影響を与えることを明らかにした。

第 2 の研究の計画的行動理論[TPB]は、Ajzen(1991)の「計画的行動理論」を適用したものである。これは、第 1 の研究の結果から、社会的イメージ及び関係的イメージが態度に影響を与えることとは、実態を鑑みてみると、「韓流」が日本人潜在医療観光客の行動と相関関係があると読み取り、その韓流のコンテンツを細分化して分析を試みたものである。その結果、韓流コンテンツのうち韓流歌謡と韓流食文化への好感度が、態度に影響を及ぼし、また、態度は心理的変数の欲求に影響を及ぼしていることを明らかにした。

第 3 の研究の目標指向的行動理論[MGB]は、Perugini & Bagozzi (2001)の「目標志向的行動理論」を適用したものである。ここでは、医療観光に関しては、訪韓日本人より先行している、中国人について、その潜在医療観光客を対象にして、の行動意図に及ぼす影響を考察している。ここでは、特定の行動の実行時に、準拠集団の行動に対する考えである主観的規範と肯定的予期感情が欲求に対して及ぼしていることを明らかにした。そして、内的・外的資源を知覚した上で行動をコントロールする知覚行動制御が欲求に影響を及ぼしていることともに、その知覚行動制御と欲求が行動意図に対して影響を及ぼしていることを明らかにした。

このそれぞれの研究における構成及び論旨は明快で、統計プログラムを用いてデータ解析を行っており論理性が担保される。観光研究においてこうした数理的方法を用いた研究は日本では少数で、対象を医療観光にしたことから、研究方法・内容の独自性、新規性がみられる。しかし、3 つのフレームワークで導き出された結論は、現在の韓国における医療観光についての実態を証明したもので、そのソリューションを与えたものではない。訪韓日本人と訪韓中国人の分析をしているが、その対比において特性が明らかになっているわけではない。日本人と中国人の対比においては、分析方法が異なるからである。それゆえ、医療観光行動意図に影響を与える要因間の関係は明らかになったもののその意味する結果がいかに関後の発展につながるか、つなげる方策の要素となりうるかの証明はできていない。その意味においては、不十分な点も見られる。しかし、本論文のテーマである医療観光行動意図に影響を与える要因間の関係を明らかにするモデルを構築しており、設定された課題に対する達成はなされている。また、このモデルは、韓国への医療観光への適用に限らず、観光学の研究において普遍性を有するものであるといえる。

3 つの研究結果の内容は論理性があり、影響を与える要因を分析する手段としてのフレームワ

ークの構築は体系性を有している。したがって、論文としての体系性については問題ないものといえる。そして、この論文は、観光コンテンツの数理的な分析方法のフレームワークの形成において観光学研究の深化に貢献し、これから日本においては拡大が期待されるものの科学的な分析方法への対応が十分でないDMOの発展にも寄与するなど実践への応用可能性が認められる研究といえる。

[最終試験の結果の要旨]

最終試験は、2020年8月8日13時より約2時間にわたって実施した。ここでは、論文審査の結果の要旨に記載した事項の信憑性、論理性、事項の内容についての補足などについての質疑が行われた。

事項の内容についての補足は、まず、医療観光とは何かの定義から確認を行った。ここでは、手術の有無を問わず、他で、メディカルツーリズム、ヘルスツーリズム、ウエルネスツーリズムと論じられているものも含め広範囲にとらえることを確認した。また、研究対象の新規性、独自性については、日本人の医療観光に触れた論文は6件にとどまることを確認し、このテーマが新たな知見を構築することについて意義あるものであることを確認した。

信憑性については、データについてそのとり方、分析方法についての確認が行われ、いずれも適切に行われたことを確認した。また、引用文献・参考文献に修士論文、博士論文が含まれるが、その出典を含めて引用文献・参考文献についての質問を行った。そして、これらは、適切に行われたことを確認した。

論理性については、3つの研究結果について総体としては、体系性が欠けるのではとの指摘があったが、本論文は、影響要因についての結果から医療観光行動についての共通要因を明らかにするものではなく、分析のためのフレームワークを提示し、その構築された過程を明らかにするものであるため、そのように論文の構成を修正すれば、論理性、体系性については問題ないと判断された。なお、この点については、今後の課題として、利用経験、当該国での居住経験や医療観光の特殊性、また、他の影響を与える変数が影響を与える可能性を示すにとどまっているが、このことは、むしろ、本研究におけるデータ分析が予定調和に基づくものではなく、分析の信憑性を裏付けるものになっているものといえる。そして、これらの課題の克服が、マーケティング施策において、今後、実務的に求められる作業であり、それを示した本論文は、観光学研究の成果として、実務における指標を示す役割ができており、このことは、観光学研究が社会に還元できる例の一つとなったものといえ、大いに意義のあることである。

審査後に指摘事項を修正し、提出された本論文に対する査問を行った結果、論文審査の結果で認めた内容を追認することができた。したがって、張美慶氏に、博士(観光学)の学位を授与することに問題ないと判断した。